

就職活動がアイデンティティ形成に及ぼす影響

— 大学生の進路指導に向けて —

早坂正年・有馬比呂志

問 題

本研究は、大学生の就職活動とアイデンティティの関連性を明確に示し、学生相談等における進路指導のあり方を検討するものである。2001年11月の完全失業率は5.5%となり(2001年12月28日付, 毎日新聞), 日本の雇用情勢は一段と不透明さを増している。その話題は、新聞やテレビ等のマスメディアの中でも頻繁に取り上げられ、解決の糸口が容易に見出せない深刻な問題として扱われている。それに伴い「デフレスパイラル」、「リストラ」、「不良債権」と言った用語は、日常的な会話の中にも定着をみせ、決して他人事ではないという感があることを伺わせている。特に、本来は再構築といった意を示す「リストラ」が、企業側からの一方的な解雇を示す用語として用いられ、生活を脅かす一般的な用語として捉えられるまでとなった。既に、職を得ている者のリストラももちろんであるが、これから職業に就く者にとっても厳しい状態であることは容易に推察される。

将来、日本の経済を支えることとなる若年層の雇用状態はどのような傾向を呈しているのだろうか。新聞によると(2001年12月17日付, 毎日新聞), 高校生における就職内定率の状況は50.7%であり、やはり企業の業績悪化や先行きの見えない不安感が新卒者の採用にも直接的に影響が及んでいることが伺える。行き詰まる経費削減の波が、新卒者の雇用圧縮までに拡大してしまった。このような厳しい現状において、学校をはじめとする機関はどのような相談活動を行なっていけばよいのだろうか。社会の諸現象が複雑に絡み合い、混乱するなかで、生徒や学生が持つ問題や不安を軽減するために、教育関係者は、進路指導をはじめとする学生相談等のあり方が既存のままで良いのか問われているのではないだろうか。

従来より、進路指導や進路選択に関する諸研究は多数なされている(下山, 1983; 足立, 1988など)。近年の傾向としては、Bandura(1977)によって提唱された自己効力理論を適用した研究が増加しているといえる。自己効力とは、ある行動が自分に上手くできるかどうかという予期, すなわち効力予期の認知されたものであり、行動と直接的な関連をもつと仮定されており、またこれは、どれくらい努力するか、困難に直面した際に、どれくらい耐えうるかを決定するものとされている(浦上, 1996)。これに関する研究の概要は、浦上(1996)に譲るが、進路選択過程における自己と職業の関係の吟味は、進路指導等のよりよい方向性を示すものとして重要な意味を持つものと考えられる。

一方、アイデンティティとの関係が深い自己概念と就職活動の関連を研究しているものもある(足立, 1990; 浦上, 1996など)。浦上(1996)によれば、専門性の高い専攻に属しているものは、自己概念の明確化が促進されず、逆に職業選択の幅が広く、自由な活動ができるものは、就職活動を行なうことで自己概念の明確化が促進されると述べている。この結果については、理論や方法論の両面からの再検討が必要であると考えられるものの、自己概念の翻訳過程(足立, 1990)を明らかにすることにつながるといえるだろう。

さて、先に述べたように、経営の合理化をめざすために行なわれる大規模な人員削減の影響は、新卒者の非常雇用化を加速させ、経済の成長を阻害させると同時に、就職戦争を激化させてしまうという悪循環を引き起こしている。その結果、一部の生徒や学生は就職内定を獲得することが就職活動の第一の目的であるという視点を持ち始めているといっても過言ではない。進路指導学会などが示した、進路選択・決定によって生まれた結果よりもその過程を重視する(藤本, 1987)という考えにも変化の影響が及んでいるのであろうか。職業選択を行うということの重要性の再確認と、それらの職業に就くという行動が与える影響力についての詳細な研究を行うことは、少なからず職業に対する見識を変化させるように思われる。円滑な進路指導や学生相談等を提供するためにも、職業の持つ本質を探る研究がなされるべきであろう。そこで本研究は、就職活動を行っていない男子大学生3年生(以下、未経験群)と就職活動を行っている男子大学生4年生(以下、経験群)のアイデンティティ(Ego Identity)形成を調査し比較することで、就職活動の影響や役割を検討し、学生に対する進路指導の基礎的資料を提供することを目的とする。

方 法

被調査者 広島県内の男子大学生141名(3年生60名:平均年齢20.7歳, 4年生81名:平均年齢22.0歳)を対象に調査を行なった。

調査時期 2000年7月上旬。

調査内容 アイデンティティ測定にはDignan(1963)によって作成された「アイデンティティ尺度 Ego Identity Scale」を使用した。この尺度は、「自己の感覚(Sense of Self)」、「独自性(Uniqueness)」、「自己受容(Self-acceptance)」、「役割期待(Role Expectations)」、「安定性(Stability)」、「目的志向性(Goal-Directedness)」、「対人関係(Interpersonal Relation)」の7つの要素からなる全50項目の質問で構成されているものである。その他に分析に必要な情報を得るために、年齢等のいくつかの質問を加えた。

手 続 き 質問は講義中に集団的に行なわれ、上述の質問項目に対して、「非常にあてはまる(5点)」から「全くあてはまらない(1点)」までの五件法で回答を求めた。

結 果

1. アイデンティティの因子構造

アイデンティティの因子構造を把握するために、アイデンティティ測定に関する50項目を用いて、主因子法によるPromax回転で因子分析を行なった。そこにおいて1.00以上の固有値を示す因子が多数認められたので2から10までの因子数を順次変えながら解釈を試みた。その結果、TABLE 1 に示す通り、5 因子の場合が最も適当な解釈が可能であった。第Ⅰ因子は、「時々私は、本当に誰なのかと思うことがある」、「時々私は、自分自身でさえよくわからないと思うことがある」などの項目に高い負荷量が認められたため「自己の感覚」、第Ⅱ因子は、「私は、みんなから尊敬されていると思う」、「今の私は、まさに私が目指す私である」などの項目に高い負荷量が認められたため「自己受容」、第Ⅲ因子は、「私の問題は、何になりたいのかわからないところである」、「私は、人生で何をしたいのかについてよく知っている」などの項目に高い負荷量が認められたため「目的志向性」、第Ⅳ因子は、「私にとって、物事を決断することは、たやすいことである」、「私は、自分の長所はたいてい知っている」などの項目に高い負荷量が認められたため「自己の自信」、第Ⅴ因子は、「私は親戚の人から、父や母に似ているといわれることが好きではない」、「人に、～の妹(弟)とか～の娘(息子)といわれると、イライラしてしまう」などの項目に高い負荷量が認められたため「独自性」とそれぞれの因子を命名した。なお因子相関行列はTABLE 2 に示す通りである。

TABLE 1 アイデンティティ尺度に関する因子分析

| 第Ⅰ因子 | 自己の感覚 | I | II | III | IV | V |
|--|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 時々私は、本当に誰なのかと思うことがある。 | | .695 | .037 | -.026 | -.085 | -.117 |
| 時々私は、自分自身でさえよくわからないと思うことがある。 | | .613 | .201 | -.311 | -.106 | -.041 |
| 時々私は、自分自身でさえ、不可思議に思うことがある。 | | .612 | .129 | -.215 | .156 | .057 |
| ずっと自分をおさえ役を演じてきてうんざりである。自分自身になりたいと思う。 | | .610 | .002 | .167 | -.115 | .156 |
| 私は大学で、人ごみにのまれてしまっているように感じている。 | | .576 | -.189 | .159 | .109 | .110 |
| 私は、自分が知っている人のようになろうとしたり、また別の人のようになろうとする。 | | .567 | -.130 | .224 | -.099 | .224 |
| 私は、今の自分とは別の何かにになりたいと思う。 | | .530 | .066 | .062 | .094 | .117 |
| 私の友達は、私がいつも何になりたいかわかっているのに、それについて不平をもちます。 | | -.517 | .250 | .023 | -.243 | .191 |
| 私は、自分自身を誰か別の人のように思い描くのが好きである。 | | .463 | -.064 | .050 | -.256 | -.011 |
| 第Ⅱ因子 | 自己受容 | | | | | |
| 私は、みんなから尊敬されていると思う。 | | -.163 | .714 | .047 | -.048 | .123 |
| 今の私は、まさに私が目指す私である。 | | -.050 | .664 | -.018 | .027 | -.044 |
| 私は完全ではないが、今の自分が好きである。 | | .340 | .514 | .073 | .018 | .034 |
| 私は一生懸命やっているので、自分自身を馬鹿にすることなどない。 | | .159 | .491 | -.235 | .163 | .001 |
| 私と一緒に勉強や仕事をしている人は、私がこれから何をしようと思っているかについて知っている。 | | -.160 | .482 | .155 | -.154 | -.028 |
| 私は、今の自分に悔いはない。 | | .095 | .473 | .071 | -.071 | .003 |
| 私は、現在、若いと思っている。 | | .134 | .410 | .101 | -.021 | .154 |
| 私は、自分の人生で本当にしたいことをそれほどしていない。 | | .337 | .405 | -.042 | -.233 | -.018 |
| 第Ⅲ因子 | 目的志向性 | | | | | |
| 私の問題は、何になりたいのかわからないところである。 | | .266 | .187 | .548 | -.247 | -.083 |
| 私は、人生で何をしたいのかについてよく知っている。 | | -.046 | .244 | .479 | -.114 | -.094 |
| 私は、時折、夜ひとりで過ごし考え事をするのが好きである。 | | .009 | -.077 | .451 | -.068 | .082 |
| 私は、自分の理想に従いたいという強い欲求がある。 | | -.156 | .101 | .410 | .197 | -.071 |

就職活動がアイデンティティ形成に及ぼす影響

| 第Ⅳ因子 自己の自信 | | | | | |
|---|--------|-------|-------|-------|-------|
| 私にとって、物事を決断することは、たやすいことである。 | .008 | -.007 | -.102 | .569 | .238 |
| 私は、自分の長所はたいてい知っている。 | -.004 | .137 | .189 | .479 | -.086 |
| もう私は両親から離れたのだから、自分のしたいことをしたいと思う。 | -.103 | -.124 | -.064 | .467 | -.153 |
| 私は、したくないことに対しては、ためらわず「いや」という。 | .033 | -.041 | .027 | .453 | .394 |
| 他者からの批判にも、私は動じない。 | .183 | -.004 | .003 | .437 | .385 |
| 第Ⅴ因子 独自性 | | | | | |
| 私は親戚の人から、父や母に似ているといわれることが好きではない。 | .083 | .179 | -.075 | .128 | -.458 |
| 人に、～の妹(弟)とか～の娘(息子)といわれると、イライラしてしまう。 | .355 | -.108 | .064 | -.110 | -.420 |
| 私は、友達という時と教師という時とで関わり方が違うが、同じ一人の人間である。 | -.152 | .187 | .016 | .107 | -.403 |
| 残余項目 | | | | | |
| 私は、人に沈着冷静という印象を与える。 | -.388 | .226 | .020 | .142 | .068 |
| 私は、大学に入って違う人になってしまったように感じる。 | .211 | .155 | .017 | -.008 | .137 |
| たいていの人から、私は自分の考えをもっているといわれる。 | -.045 | .321 | .305 | .159 | .038 |
| 初対面の人と会ったとき、自己紹介をするのが好きである。 | -.025 | .312 | .051 | .149 | -.072 |
| 今の私は、高校時代の私より、もっと私らしい。 | -.033 | .307 | .251 | .106 | .021 |
| 私は、名前ではばれるのが好きである。 | -.086 | .306 | -.081 | .055 | -.095 |
| 私は、自分の弱点をよく知っている。 | .035 | -.025 | .392 | .178 | -.184 |
| 一日、一日、私は違う私である。 | .248 | .012 | -.355 | .058 | -.162 |
| 人がどう思おうと、私が大切に思うことに關しては喜んで挑戦する。 | .188 | -.126 | .350 | .186 | .028 |
| 反対して争うよりも、自分の考えは出さないでおくほうが楽でいい。 | .239 | -.080 | .319 | .195 | -.061 |
| 勉強や仕事とは別に、芸術や政治、スポーツなどの現在の出来事は私をワクワクさせるものである。 | -.046 | .163 | .288 | .182 | -.078 |
| 私はいつも、自分は大学生であるという自覚を持っている。 | -.008 | .235 | .265 | .015 | .003 |
| 私は人から別の同性の人と間違われることはない。 | .053 | .149 | .169 | -.027 | -.155 |
| 私は、自分の成し遂げたことに本当の意味で誇りをもっている。 | -.112 | .238 | .080 | .386 | -.255 |
| 私が人に衝撃を与えるのは、私の強い信念である。 | -.124 | .007 | .157 | .376 | .038 |
| 異性の人ができることを自分ができなくても、私は気にしない。 | .135 | .066 | -.038 | -.012 | .349 |
| 自分自身からみる私と、他者の目に映る私は、とても似ている。 | -.079 | .301 | .065 | .132 | .348 |
| 私は、高校時代ほど大学で変わったとは思わない。 | .012 | .140 | -.280 | -.005 | .347 |
| 自分以外の同性の人がするたいていのことは、私からみてつまらないことである。 | .314 | .137 | -.023 | .004 | -.338 |
| 性的な事柄には、もう悩んだりしない。 | .112 | .152 | -.048 | .114 | .292 |
| 新しい人と知り合いになるのは、私にとってうれしいことである。 | .215 | .000 | .236 | .232 | -.252 |
| 因子負荷量二乗和 | 4.810 | 4.828 | 3.367 | 3.419 | 2.046 |
| 寄与率 (%) | 13.908 | 6.400 | 4.027 | 3.357 | 2.703 |

TABLE 2 因子相関行列

| 因子 | I | II | III | IV | V |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|
| I | 1.000 | | | | |
| II | .310 | 1.000 | | | |
| III | .197 | .301 | 1.000 | | |
| IV | .190 | .417 | .269 | 1.000 | |
| V | .042 | .072 | .084 | .064 | 1.000 |

2. 就職活動の有無とアイデンティティ形成

就職活動経験の有無がアイデンティティ形成にどのような影響を与えるかを検討するために、因子分析によって選出された項目を用いて、就職活動未経験群と経験群のアイデンティティ得点を算出した(TABLE 3)。この得点の両群の差を検討するためにt検定を行ったところ、経験群の方が有意に高いことが示された($t=5.34, df=139, p<.01$)。さらに、アイデンティティ得点に及ぼす年齢の影響を検討するために、各群ごとに年齢を要因とする分散分析を行なったが、両群とも有意な結果は認められなかった(未経験群： $F(2, 57)=1.43, ns.$ ；経験群： $F(3, 77)=1.14, ns.$)。

TABLE 3 アイデンティティ得点

| | 未経験群 | 経験群 |
|------|---------------|---------------|
| 人数 | 60 | 81 |
| 平均得点 | 83.63 (11.25) | 94.23 (12.02) |

注) () 内は標準偏差を示す。

3. 就職内定の有無とアイデンティティ形成

就職内定の有無がアイデンティティ得点の上昇に寄与するかを検討するために、就職活動を行っている者(内定獲得者； $n=32$ ，内定未獲得者； $n=40$)を対象にt検定を行った。その結果、両群には有意な差は認められなかった($t=1.50, df=70, ns.$)。

4. 因子ごとのアイデンティティ得点について

就職活動によってどのような因子が影響を受けているかを検討するために、因子分析の結果をもとに、因子ごとの得点を算出した。結果は、TABLE 4, Fig. 1 に示す通りである。算出されたそれぞれの得点についてt検定を行ったところ、「自己の感覚」、「自己受容」、「目的志向性」、「自己の自信」の4つの因子で有意な差が認められた。これにより就職活動を経験することで、「独自性」以外の4つの因子が影響を受けることが明らかになった。

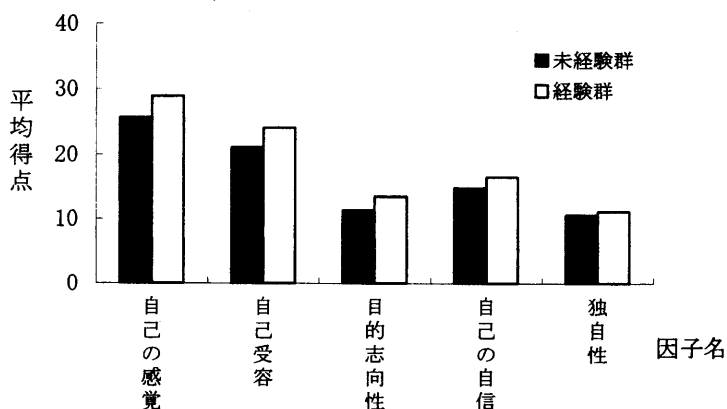


Fig. 1 就職活動経験群, 未経験群の因子ごとの得点

TABLE 4 因子ごとの得点と差の検定結果

| | 自己の感覚 | 自己受容 | 目的志向性 | 自己の自信 | 独自性 |
|-------------|--------|--------|--------|-----------|--------|
| 未経験群 (n=60) | 25.70 | 21.08 | 11.37 | 14.82 | 10.63 |
| | (5.16) | (5.52) | (2.70) | (2.65) | (2.28) |
| 経験群 (n=81) | 28.90 | 24.09 | 13.51 | 16.49 | 11.25 |
| | (6.13) | (4.87) | (3.17) | (3.80) | (2.35) |
| 差の検定結果 | t=3.28 | t=3.42 | t=4.22 | t=3.09 | |
| | df=139 | df=139 | df=139 | df=138.52 | ns. |
| | p<.01 | p<.01 | p<.01 | p<.01 | |

注) 上段の数値は平均値, () 内は標準偏差を示す。

考 察

本研究の目的は、アイデンティティ形成と就職活動の関連性を明確に示し、より良い進路指導の方策に寄与することであった。結果において重要な点は、就職活動の経験することによってアイデンティティ形成が促進されていることであった。この就職活動の経験の有無で得点に差が生じている背景には次のようなことが考えられる。まず第一に、就職活動経験群は、就職活動の過程で他者との違いを多く感じる機会が増加すること、さらにY-G性格検査を代表とする各種の性格検査を行い、自己に対する関心を高めることや受容を行う機会が増加している一方、就職活動未経験群は先に述べた機会がさほど多くなく、自己の明確化がイメージ段階の曖昧なものであり受容の進展が遅いといえよう。第二に、就職活動を行うものは継続的に明確な目的を持つ機会が増加すること(例えば、内定を得ているにもかかわらず、さらに上の企業の内定獲得をめざすことなど)、第三に、就職活動を行なうものは卒業後の進路を独自に選択しなければならない状況にさらされていることなどがアイデンティティ得点に差を生む要因として考えられる。

次に、本研究の結果より、アイデンティティは5つの因子により構成されており、就職活動を行うことによって「自己の感覚」、「自己受容」、「目的志向性」、「自己の自信」といった限られた因子が影響を受けることが明らかになった。逆にいえば、「独自性」という因子は就職活動では影響を受けず、独立した形で存在している可能性があることを示唆するものといえよう。これについては、今後、詳細な研究を行い明らかにしていく必要があるといえる。さらに、アイデンティティ得点は、就職内定の有無、いわゆる成功・失敗といった結果的なものに左右されず就職活動を行うことで一様に上昇することが明らかになった。これらは、藤本(1987)などが示した、進路選択・決定によって生まれた結果よりもその過程を重視するといった考えを支持するものといえ、就職活動における重要なポイントを示す1つとして考えることができよう。

高学歴社会になり学卒者が増加する一方、モラトリアム期の延長が原因となる青年期延長の問題

が取り上げられている。現在のモラトリアムの種類を検討すると、社会からの責任や役割を問われることのない居心地のよさに浸ってしまうタイプとEriksonやBlosが示した古典的なモラトリアムに類似したタイプに大別できるといえる。要するにモラトリアムの質自体も社会の多様な変動の影響を受けて変化しているといえ、そのタイプもいくつか存在しているといえる。しかし、そのような中でも大学生のアイデンティティを形成するための手段としての就職活動の存在は大きく、職業に就くための過程を重視した、より効果的な活動を行うことで自己確立を促進できるものと考えられる。本研究において、就職活動経験群と未経験群の間に得点の差が生じた結果から、就職活動を行うことが大学生のアイデンティティ形成において強く影響を与えることが明らかにされた。また、将来に対する目的意識とそれにとまなう環境や境遇が就職活動下におけるアイデンティティに与える影響の中心として考えられるが、因子分析の結果から伺えるように、アイデンティティを構成する要素は非常に複雑であることがこの研究でも示された。アイデンティティはEriksonが示したように多義的で、曖昧で複雑な概念であるといえ、さらに研究を進めていく必要があるといえよう。本研究は、就職活動が大学生のアイデンティティに確かな影響を与えていることを示唆しており、今後の進路選択及びアイデンティティ研究の発展につながるものといえる。

今回の研究は、同一の集団の成長過程を追跡し、異なる年齢時にデータを採取する縦断的方法ではなく、年齢の異なる別々の集団を対象とする横断的方法であること、さらには就職活動経験群を4年生、未経験群を3年生とした等の課題を残している。今後はそれらを改善したうえで専攻による差や留年者のアイデンティティ得点の傾向などを再検討することで新たに分析を進める必要がある。そして、これらの研究によって進路指導等のより良い方策・方法が創出されることが望まれる。

<引用・参考文献>

- 足立 明久 1990 “自己概念の職業的用語への翻訳”の過程に関する認知構造 進路指導研究, 11, 1-9.
- 足立 明久 1988 進路指導における自己実現過程と構造—メタ認知的考察— 進路指導研究会, 9, 19-27.
- Bundura, A 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Dignan, M. H. 1965 Ego Identity and Maternal Identification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 476-483.
- Dignan, M. H. 1963 Ego Identity, Maternal Identification and Adjustment in College Women. Unpublished Doctoral Dissertation, Fordham University
- 藤本 喜八 1987 進路指導の定義について 進路指導研究会, 8, 37-39.
- 古城和敬・上野徳美・高山智行・山本義史 編著 1997 あなたのこころを科学する Ver.2 北大路書房
- 松本卓三・熊谷信順 編著 1992 職業・人事心理学 ナカニシヤ出版

- 浦上 昌則 1996 女子短大生の職業選択過程についての研究 — 進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から — 教育心理学研究, 44, 195-203.
- 野沢英司 訳 1971 ブロス『青年期の精神医学』 誠信書房
- 小此木啓吾 1978 モラトリアム人間の時代 中央公論社, 8-75.
- 小此木啓吾 訳編 1973 エリクソン『自我同一性』 誠信書房
- 下山 晴彦 1983 高校生の人格発達状況と進路決定との関連性についての一研究 教育心理学研究, 31, 157-162.
- 下山 晴彦 1992 モラトリアムの下位分類の研究 — アイデンティティの発達との関連で —, 教育心理学研究, 40, 121-129.
- 鐘幹八郎・宮下一博・岡本裕子 編 1998 アイデンティティ研究の展望 V-1ナカニシヤ出版
- 鐘幹八郎・宮下一博・岡本裕子 編 1999 アイデンティティ研究の展望 V-2ナカニシヤ出版

付 記

本論文は2000年度近畿大学工学部経営システム工学科卒業論文に加筆修正されたものである。この研究の一部は中国四国心理学会第57回大会で発表された。